

大木茂（畜産フードシステム：牛豚鶏）、池田裕美（動物行動学、牛）、水野谷航（食品科学、豚）、加瀬ちひろ（動物行動学、鶏）

研究の背景

肉・牛乳・ソーセージ・ハム・卵・ヨーグルトなど、日頃の食事に畜産物は欠かせない。しかし農林水産業は、世界で23%、日本で4.4%（2020年度）温室効果ガスの排出源となっており、畜産は日本の農林水産分野の4分の1以上を排出している。持続可能性が問われる中、1つの方向性として「放牧畜産」が注目されている。放牧は、景観としても物質循環の面からも効果が大いと考えられるものの、広大な敷地、伝染病や怪我の対策、生産性の低下など、実現に向けたハードルは高い。そこで、放牧畜産の実現に向けた問題点と課題を整理する中で、これからの畜産の新しい可能性を探ろうと思う。

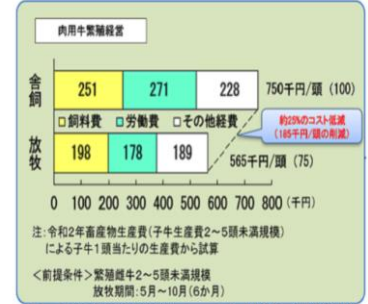


図2: 肉用牛繁殖経営のコスト比較 (試算例)

アプローチ

放牧の問題点と課題の整理を、地球環境、経営経済、という2つの面からアプローチする。実際に放牧を行う経営や専門家へのインタビュー（フィールドワーク）を定期的に（例えば2ヶ月に1回程度）行ない、インタビューから問題点と課題を整理する。それらを踏まえて、実際の放牧において、動物行動学・食品科学等の専門の視点からアドバイスをいただきながら、課題整理・フィールドワークにフィードバックする。実験は計画にはありません。あくまでも現地視察によるフィールドワークを軸に、座学として課題学習・認識・議論に基づくアクティブラーニングを行います。ただし興味関心が高まっていけば、視野に入っていくこともあり得ます。

農水省HP 放牧の部屋

期待される結果

放牧について、どの程度の可能性があるのかを自分で考えることは、深く学ぶ方法論を身に付けることができる。

まだ課題の整理と議論は、公務員や企業における商品開発・新規事業立ちあげにともなうプロセスなどとも類似しており、ディスカッションは将来の就職活動等に直接役立ちます。

課題はそう簡単に解決できないことを理解することにもつながり、より一層の主体的な社会的なアプローチが必要であることを理解できるでしょう。

なによりも、放牧の魅力を自分の言葉と身体で表現できるようになる。放牧は21世紀型畜産の象徴的な姿と考えています



ぶうぶううう農園HP

募集方法

申込期間に大木にご連絡ください。研究の希望畜種に応じて相談しながら具体的な方法を検討していきます。なお、共同研究の先生方はアドバイザー的ポジションで、募集人員は畜種あわせて1-4人です。